

Marjolijn Ketelaar 著, 今川忠男 監訳

脳性まひ児と両親のための機能的治療アプローチ

福井 勉 (昭和大学保健医療学部)

本書の内容から想像される対象は、小児分野を専門としてきたセラピストのみならず、私のような門外漢やフレッシュな方々にも理解ができるように書かれている。原著者は若くエネルギーがあり、さらに理論が明確で妥協をしない人柄なのではないかと感じられた。

本書では、エビデンスを詳らかにすることで機能的評価と治療介入の妥当性を論じている。脳性まひに対するさまざまな評価方法についてのレビュー、PEDI の紹介から始まり、治療介入プログラムへの両親の参加意義について論じられている。従来の神経生理学的アプローチの問題点、その根拠となる中枢神経の成熟についての解説は歴史的背景を踏まえた今日的視点と捉えられた。さらに治療的介入を如何に有効にするか悩んできた小児分野セラピストの汗の結晶とも感じられた。

本題である機能的理学療法プログラムの効果については、明確に肯定するわけではなく、今後の課題が大きいと結んでいる点が逆に著者の意気込みと決意を表している。治療介入プログラムに両親が参加する度合いが、肯定的結果を生む境界になる点であること、また環境の重視によって具体的な治療介入

を変容させることから現実的路線を歩むベクトルが強くなりつつあることを感じた。機能的な技能遂行は、個人、環境、課題というサブシステムの相互作用を分析することにより評価される点、アクション・システム・アプローチが如何に機能的治療に影響を与えているかについては、近年の理学療法のパラダイムシフトなのであろう。これについては小児分野特有のものではなく、例えば私の仕事としている整形外科分野の理学療法に対しても示唆をいただく点多かった。

特筆すべきは、この種の訳本にありがちな思考を止める言葉ではなく、日本語訳が素晴らしい。監訳者である今川忠男氏は広い視野で枠組みに捉われない姿勢を持つことに共鳴して日本語版を思い立ったのであろうと推察される。原著者が訳者と初めて対面した際の、双方の息遣いが、原著者の「日本語版への序」で伺える。本書で問うわけではないが、セラピストが毎日仕事の基盤としている理論や枠組みを再考する良い機会であり、若いセラピストに是非読んでいただきたい一冊である。

(A5 頁 168 2,415 円(税込み) 2004 三輪書店 刊)